

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2017. 2



平成29年2月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻第2号

No.705

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまきた北上した、すべての未開なものを作化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。



# いのちはなやぐ

柴田登志恵

昭和二十九年生まれ。  
天平グループ所属。

うたた寝の猫のかたちの雲はやし空高きところ風吹くならむ  
まどかなる湾のむかうの玻璃のビルタベ光の塔へ変化す  
入り海に浮きてきらめく空港のビル背高く宙へゆくらし  
飛ぶ鳥の一羽の止むる滑走路もとより空はかれらが領域  
夜渡る鳥はひそやかに鳴きかはし闇よりふかき虚空を旅ゆく  
おとろへぬ天災地変のこの国へ渡りを早めしゆりかもめの白  
渡りこし鳥は内海へやはらかき航跡広げゆつたりとゆく  
鳴き叫び大き羽たたくはじめての渡りを終ふる若鳥ならむ

ゆりかもめ点となるまで舞ひあがり空と海との蒼を行き来す

ふるさとの北の大地へ身を埋め渡り来ぬ鳥あまたありなむ

ねむる鳥懐きたるまま大潮は街真中まで川をのぼり来

幸くあらば明日またあはむ水をける鰐しろがねに舞ふ夕茜

夜半からのはそき雨やみ川の辺の桜にはかにもみぢす朝  
うすべにの露のなかから貨物船出でくる唐突金色かがやく

インディアン・サマーといふは草も樹も紅葉に燃ゆる地平のひととき

はなやかな紅葉の季の過ぎゆかばしづかなるらむ父を葬りぬ

大公孫樹ひと夜にくがねおとす日は蟬蟬しづかに鎌をおろす日

街ちかき浜に見慣れぬ鳥來たり翼やすらへまた飛びゆかむ

あさ明けの朱の海境くぐりぬけ鳥はまつすぐ宙へ向かひぬ

はてしなき宇宙のときの刹那ともいのちはなやぐ惑星青し

# 作品 A

もとむらしげと

ツーショット

・そ

宮本靖彦

我が誕生日

・凌

國のゆくへ預かる重みどこへやら好き勝手に変へゆく政治  
大らかな人と思ひし毛利氏の宇宙飛行士の厳しさに触れる  
息子ふたり娘ひとりを目守りつつわが人生の熟年すすむ  
不器用な子より届きしツーショット寄り添ふ人ゐる初めての写真  
子の後につきて來たりしおとなしき人を今日より娘とおもふ  
いつの間に階下の笑ひ声の止るにけり眠りたるらし妻のマッサージ  
濃きみどり鮮やかな白 葉の花の譲らぬ主張庭の木槿は

三浦好博

わが心なり

・銚

冬晴れの我が誕生日祖のだれも生きざりし齡をしこしこ歩む  
腰痛帯、猫背ベルトを妻と我着くる身なれど今日も出で行く  
息子のくれしワイン一瓶なんとなく栓開けがたく戸棚にねむる  
積みあぐる本の増えゆく我が部屋に創意とぼしと机がなげく  
ゴルフコースのカートにもみぢ葉乗りこみて子等と記念のプレーを飾る  
紅葉の朝の舗道に散りしけば錦刺繡の帶地のごとし  
わが街の唯一つの山島熊に紅葉赤き実飾る季来ぬ

御代田澄江

小さな旅

・茨

陸橋に差しかかる時秋の陽は今日の終はりの輝きを増す  
ひと恋ひて聴きしチャイコのコンチェルト天空の焼火退くも知らずき  
コーヒーに手を伸ばすとき読みさしのページが戻る乾く音して  
杖を持つ手の冷え来る今朝なるに我の今年の手袋初日  
立冬の舗道に這へるかたつむり世に遅れたる我のごとくに  
陽の恵み果実に満ちて林檎園に子を抱くこと採り入るるきみ  
遠く住む幼児に会ひに行く朝の筋雲高くわが心なり

地に低く咲くガーベラを愛しめば野分は強く背を吹き行く  
輝きて赤く咲きてし鶏頭の光は失せて黄昏の来ぬ  
この日頃の無事をよろこび尋めゆける直通列車の小さな旅へ  
列車通過の姉住む川崎兄住む横浜想ひつつ乗る旅は短し  
プラタモリ紹介せしとの曰あり人垣縫ひて登る江ノ島  
浮引きて遊覧船の航く後を自在に遊ぶ水上バイク  
サーフィンを為す人あまた波に浮き湘南海岸ここはまだ夏

牧 雄 彦 萩

・大

八乙女由朗

砂押川

・柴

晩夏光おだしく差せる山道に草萩咲けり氣づく人なく  
空を飛ぶ鳥には萩の小さき花見えるかこのひそと咲く花  
色づける稻穂の上を飛ぶ蜻蛉秋を運びて辿りつきしか  
溢れくるものを抑へて静かなる夜を熟したる柿の皮剥く  
雲の間を冴えたる白き月が見ゆ手を止めてこの空を見に来よ  
嵐過ぎて静かなる夜の訪れを杜のカラスのひと声ひびく  
キヤリーパック曳きつつ手を振る小さき影秋の日まとひわれに近づく

松 浦 稲 子 新 装

・羊

小田原城囲めるつわもの共の碑にかなた相模の海はなごめり  
秀吉との和議に残りし氏のすえひそと生きいんいすこか知らず  
常盤木門石垣に触れ登りゆく木綿のシャツに今日は氣負いて  
北条氏五代の土地にイヌタデは新装成りし天守をいたく  
大桶の梢はるかに仰ぎつゝ息整えん自らのため  
城のある街ほこらかに登みたる小田原提灯旅のみやげに  
馬出門きいと開かれ出てゆく人馬まぼろし夜の小田原

松 永 智 子 目 薬

・嵐

この秋の遁走されど月の夜の風しつもりて首すぢの冷ゆ  
かなしむといふにはあらず草のにほひ土のにほひのすでにしとほし  
さへざるものなにひとつなき霜月避けそこねたり夜の自転車  
遠ざかる自転車一台仰ぎみる路地の空なり雲ちぎれ飛ぶ  
蒼白くひえひえとして十七夜の月なにこともあらずかたぶく  
ひとつづくの夜の目薬しみとほりかわききりたるこの秋の冷え  
新聞のとどく聞なりあかとき バイクの音の近くなりくる

山 下 雅 子 霜月の朝

・智

苦のにじむことば静かに伝わりて象徴の重み今し思えり  
道の端にそそと一本にらめる花しらじらと品よき風情  
天窓を覆うは雪か霜月の朝冷え冷えと五十年ぶり  
味噌汁を欲しと詠めるにうるうるする祖国にとどく本音の誠  
転がれるビタミンDの茶の玉が朝日にきらら発光し出す  
チヨコレーートは如月の季語なりという目覚めしばし夢に拘る  
一筋の電飾きらめくはなやきに包まれ行けりこの世の道か

横 田 敏 子 雪を待つ

・福

野積みさるるフレコンバック朽ちゆかん被災の町に五年を眼る  
多分もう還らぬ家か被災地に今も崩れしままの家、家  
避難せる子等が各地で「菌」呼ばわり怒るにも値せぬ人が居る  
「まっすぐな道でさみしい」山頭火 曲りし道もきっとさみしえ  
双眼鏡当てて眺むるスーパー・ムーンかの星条旗いすくに立つや  
雨に濡れし夜のアスファルトを彩りてイルミネーション弾ける踊る  
寒けれど心の何処かで雪を待つ逝きにしちちはは夫は待つこと

吉内尚彦 金の斧

・浜

飯田勤 初雪

・む

金の斧を欲しがるような人多くボランティア役員引き受け手なし  
美しく咲きしがゆえに切られたる生け花展の数多のいのち  
花梨の実一つを散歩の友としてポケットに入れ秋晴れの道  
足とれしバッタのありぬヒトわれは杖つき三本足となりたり  
老犬にも増えたりといふ認知症苦しむなかれと神の配慮か  
小白鳥早みずうみに飛来して湖北の秋を深めゆきたり  
わが事はわが負うよりなかりけり腱鞘炎の手をさすりつ

吉永惟昭 前兆

・熊

象徴の示唆は退位かしおれゆく菊見つめいる昭和一桁

月太し 重き昭和の浮かび消ゆ 賭も戦しきトランプ占い

成り得ない協定と知り決裁す良識の府の外に降る雪

千切れ雲領土は還り来ぬままに茜に染めてかすめ飛ぶのみ

革命は独裁を呼び半世紀 次は何処かゲバラとの夢

五輪後も逝す資産のしおらしさ小池も森も競い残さん

戦争を放棄せし国平和ボケ流浪の民となりて踏む霜

朝井恭子 境内

・森

磯田ひさ子 粕の木

・森

境内に立つ「呆け防止」の地蔵尊に数珠をまさぐり嫗ら祈る  
わが残生いくばくならむ本堂の薬師如来のほのと笑みます  
ほたほたと降る時ならぬ秋の雪に皇帝ダリア頭を低く垂る  
山茶花の初花に降る秋の雪五十年ぶりの珍の景なり  
葉脈の際立つ大き葉を落し若き桜の木水雨に耐うる  
裏山に鳴くリスの声くっくと小鳥のさえずり圧して高し  
公園の鉄柵の上を懸命に走るリスあり野生を見せて

窓開けて空見上げれば絶え間なくぶての如く雪降りしきる  
霜月に降りくる雪におどろきぬ五十余年ぶりとふニュース流れる  
しんしんと降りくる雪をよろこぶか二匹の小大家うちを駆ける  
木の下のつぶらに赤き万両は木の間をもるる雪に消えたり  
裏庭の通路に屋根の雪落ちて豪雪地方もかくやと思ふ  
かつてわが愛車に今や孫乗るも屋根に積もりし雪を払ひぬ  
秋晴れの心地よき日に恵まれず今年は早き冬のおとづれ

石橋美年子 去年今年

・華

花よりも実を採びたるさ庭の白菜大根冬日に笑う若き女あり  
植えつけしか細き玉葱越えの覚悟もともに若き女の日の

落葉松の一筋に黄葉の道となる右へ曲がれば麦草峠

紅葉なすブルーベリーはわが庭の寒気去りし日の晚秋のスポット

ことさらに想い重なる野紺菊更地になりてわだかまりも消ゆ

松並木を断ちたる道よ歲月は幹ふとらせぬ 風除け公園

何処へも遠くなりたり去年今年元氣ですよと雲に声そえたき

兼六園の琴柱灯籠のかたはらに母と憩ひしよ二十年前  
雪吊りを背にせし母を写したりその雪吊りの松を見上ぐる

親不知子不知を経て金沢へ二十年前なり母の病む前

明日吊るといふ雪吊りの心柱十本余りどうと横たふ

市役所の職員なれば雪吊りの作業は平日のみと知りたり

石垣の上に広がる青き空もみぢ烈々 それのみの景  
みどり渡き葉をこんもりと聚の木 兼六園の退屈破る

## 市原志郎

冬

・萬

## 奥田清和念力

・大

十一月めずらしいとの一日中雪はやっぱりしんしんと降る  
洗濯物干す妻の姿ありやっぱり共に老いしと思う  
夕方の街をゆく時遊びいる子供はわれの孫と見まがう  
吾に無関係のコマーシャルばかり見ていたり午後半日は続きていたり  
寒い朝と暖かい朝お互にてわれの体をさいなみて  
血糖値血圧共にあがりくる昨日今日と外寒くして  
リハビリの時しも暖房の音消えて途端にガラスゆする冬の風

## 市原 やよひ

冬芽

・萬

すでに冬芽つきたる枝を切る一瞬息を止めたるのちに  
黄の葉の陰につきたる冬の芽は堅く縮まりて輝き放つ  
霜月の雪一日中降り続きテレビも伝う日がな一日  
降る程にアスファルトの道に消えて行く十一月の雪のはかなく  
雪なくば少し寿命も延びたろう庭彩りし鉢花五つ  
メチャクチャとヤバイヤバイが飛び交いてグルメ番組終わりに近し  
良き事も悲しき事にも顔を出す「ヤバイ」の一語老いには不用

## 上田吟子

会話

・鳩

きみいづこ吾はなにものうすぐらきベランダに坐し夕焼け仰ぐ  
たそがれのひとりぼっちの身に沁みてかへらぬ人と天に会話す  
生も死も必然なれどううつと日々をすごして刈田に迷ふ  
掌にとどく二上山の夕昏れてうづまく雲は天のみしるし  
いくそたび巡りし吉野西行庵とくとくの泉 老木のさくら  
残り少なき柿を食べんとひよどり二羽上よりつづきてゐたり  
厚物第三十鉢もの世話をしてはそはそそくさ片付けてをり

いくさゆゑ二十歳の学園別れ来てふたたび会はずいつしか卒寿ぞ  
六十三年ぶりに文通はじめたる友の筆跡薄目にたどる  
訓導の辞令かしこみ赴任せし新米教師夢果てざりき  
子供らも「赤いリンゴ」を口ずさむわれは二十歳の熱血教師  
ふるさとは板木のあがた天子なる高天原か古きわが友  
庭隅のやぶつか咲く五輪ほど眼を病みそめしわれにいとしく  
視神経侵されゆけばうつし世の万象いつしか念力に視る

## 奥田陽子

シベリア

・羊

脱ぎ棄てし葉に足もとを包まれてあたたかからん裸木の立つ  
匂いくる煙の煙に寝みつつ火を焚く人の赤きジャンバー  
菖蒲はや芽を吹きている湿地にて冬なお枯れず湧く水のあり  
八分ほど葉を落としいる川柳かすめて飛べりいすこを指せる  
山茶花を出で来し鳥の放ちたる声のするどさ紅の花散る  
やや大きく水面に映す己が影しばしの間を驚の見ている  
鳥により選ばれし地ぞ今日ひと日耳に親しきシベリアの名は

## 小野雅子

ざくろ

・羊

生つたまま未枯るる柘榴くれなるの輝く粒も内に枯れゆく  
ほぐされて掌に余るほど配られし敦煌の旅のざくろの粒よ  
北京の動物園で見しキンシコウ今でも生きてゐるのだらうか  
救急車来て停まりたり誰彼と噂とび交ふ団地のま屋  
一年生には大きすぎるランドセル小さく見ゆる六年生のは  
面白くすりと笑つてそれだけですまぬ村晃作氏のうた怖し  
夕ちかき地をあかあかとするまでに斜面をおほひかたばみの咲く

柏原宗一 しづかなる道

・羊

青空から機影のみ過ぎゆきてやがて轟音が続きてゆきぬ  
しづかなる道を歩むに鶴鳴は吾が前をゆく案内者のこと  
十分間ひとに会はずき静かなる人がのぼり来息切らすおと  
足もに轟をいそげと言ふべくしてつつとわが前に寄りてゆきたり  
足もとを木片あると思ふ吾が前をゆくものは鶴鳴と知る  
軒下の風鈴の音 単純に聴きつつあふぐ朝の光を  
風鈴は夏には心地よけれども冬ちかづけば障るばかりに

菊岡栄子 音立て転ぶ

・連

うたた寝の吾の傍に寝入る夫居場所をさぐる暗闇の中  
薬飲む水をようやく探しして途端に大きな音立て転ぶ  
叱られてばかりの吾にもうダメとメール打ちたし優しい息子へ  
リストカットする吾の想像すうたた寝の間に忘れているも  
この日頃失敗ばかり続きおり再び他人の役には立ち得ぬ  
考えていること夫に伝わらず手も震えす今日この頃は  
人の目を気にすること夫を察じつつ何時まで続くかこの生活は

草刈十郎 寺山子

・世

台風の過ぎればすぐ又來たるばかり知れない自然の脅威  
昨夜よりひたすら暴れ雷鳴も使ひ果たして嵐去りたり  
夜汽車にて青年ひとり青春をかじるがごとくりんごかじれり  
戦争を知らぬ為政者ばかりなり体験者なきその危うさよ  
遠花火光につづく音のきて少年の日の夏を思へり  
風吹ける晩秋の田に立つ案山子うしろ姿に漂ふ哀愁  
照りつける猛暑の中に反核の同志のごとくカンナ燃ゆなり

國井節子 千手觀音

・春

葉かげより葉かげに移る小鳥るて山茶花の白はらはら舞ひ散る  
せきれいが要心ぶかく前をゆく見通しの良き古都の草原  
満月のひとときは大きめでたかり雨後の雲間にぬつと顔を出す  
日の透ける掌じつとみつめをり生命線の淡く消えさえ  
得がたきは時なり時はいちはやし千手觀音手を貸したまへ  
奈良町の餅つき早搗き有名なり町の通りも餅飯殿とふ  
皇帝と名の付くダリヤ欲すれど届かぬものとあきらめにけり

小泉泰清 花水木

・う

花水木の紅葉枝ごと重なりて風しづけきにばぐれず耐ふる  
花水木の花良し紅葉も美しとて妻と語らふ庭眺めつ  
朱のいろの紅葉いやます花水木 木枯しさんよ吹かずにおくれ  
梢より散り初むのみちの花水木夕べの雨に露しとどなり  
春に花秋にもみちの花水木夕べの雨に華やき終る  
明け方の窓辺かすかにゆらす音地震かとさめて揺らげるまさに  
明けやらぬ東の空に黄土色の下弦の月は地を睨み見ゆ

河野繁子 満ち潮

・雁

クレーンを林のごとく集めた造船所らし海近き道  
人おらぬクレーンの群れ思い切り手足をのばし踊る夜なきや  
満ち潮のさかのぼる川逆流の到達点にわくらばよどむ  
一日に二度のみちしお流れ入り魚の新顔つれては帰る  
水鳥の一羽もぐりて時ながし浮かぶを待ちて歩みをはじめ  
小枝ごとひらりと落とし冬となるメタセコイヤの立ちならぶ苑  
山の霧はれて紅葉のもゆる赤藤城清治の侏儒とびはねる

小西美智子

透明に

・大

近藤栄昭

赤城山

・福

“特選”の製作者の名につけられし黒きリボンに吸いよせらるる「萌えいす」と黄色にけむる森の緑は遺作となりしもひかりを放つ描きつつ心は透明になりけんと画家のみ魂に触るる心地す褐色に変色したる辞書類はともに生きたる年月示す

反故といえど頭に浮かびし片片を書きとめたるを捨てがたくいるいつまでもなにを惜しみて取り置きし小さなくつ下小さな帽子茶の色の落ち葉を根元にかさ高く積みてユリノキ冬に向かえり

小林能子 小惑星ナガクボ

・羊

昔話のテープ六十本発見と報せは三月十一日に

三十五年前は山路に馬頭観音祀られてゐて馬を飼ひし村方言資料テープ発見のよき報せコスモスを庭いっぱいに戯がせて主の福島通ひ統へらし長久保赤水生誕三百年に拂く四月「小惑星ナガクボ」の承認なりぬ市庁舎の再建進み駅前に若き赤水の銅像いきづく六角の塔にはおとと明るむは丹精の花実フルーツほほづき

小山宣子

閑寂の園

・詩

思ひ草南蛮ギセルの別名ときけば淡淡とさびしくれる

秋明菊ひと目見たくて開け放つ窓より凜凜と吹きこむ秋気一瞬に影見せて山の空をゆく鳥よ不肖の母われに似て

晩秋の波動雲湧く彼方にてハーゲンクロイツの旗上がるとふつやかな高野楨の緑まがきなし赤き山茶花すきまを埋む太鼓橋わたせる小川さはやかに赤糸とんぼスイとよぎりぬ吉備真備の待ちしや紅葉の下枝よりま赤く冴ゆる閑寂の園

坂上直美

秋の水

・天

若き日のわれの歩くを速く見つ光りつつ秋の水ながれゆくおみなごに生まれ文書く樂しさよ「姉さま今日はよい天氣です」薄紅と白のコスモス野を覆う職退きて後の穂やけき日々若き日はかくまで心惹かれざりローランサンの淡きみずいろ忘らるるおみなの辛さ「鎮痛剤」恋に生きたるローランサンの忘らるるその身の辛さローランサン「鎮痛剤」は効かでありしか秋の水ながれ再び帰らざる彼方の空は夕映えの色

赤城山向かう雪みち除雪すみマイナス5℃を急カーブする八丁峠鳥井峰は行き止まり除雪の壁の袋小路に雪壁をドンと突きたる手の痛き春立つ暦も雪まだ堅きアイゼンの爪を確かめ山を見る装着前の土壇場の業雪山の踏み跡かるく縮まりなし軽アイゼンの利かぬ猫岩さらさらと降り来る霧氷風にのり陰の小枝に星と付きいる小鼓の調べをボボン笛の音をヒューッと雪は神楽の世界

近藤芳仙

城社公園

・信

坂出裕子 金木犀

・ 洛

いつまでも月を見てをりいざよひの青ふかく澄む空のまほらの  
こんな日が来ると思はずあのころは 心ゆくまで月を眺むる  
どこからか香りきこゆるもくせいの秋のひかりのなかをゆきつ  
ほらここに咲いてゐるよと木犀が香りかかぐる金のひかりの  
生きをればこんな日があるもくせいのかをりいつぱい胸に吸ひこみ  
夜空ゆく赤き点滅しこと終へ家路をたどる人を乗せるむ  
もくせいの香りたちくる夜の雨降りはじめたる窓のあたりに

佐久間 眩 山毛櫸（一一五）・ 湾

ブナ森の奥にひそめる静もりは若しや神というものかも知れず  
やがて来んブナの巨木の根明けなれどなおも冷たき雪の静もり  
ある時は恐ろしくまた或るときは優しきブナ森は香川師と同じじゃないか  
もうここでブナは限りにせんものか遂に見当らず「吾」と言うもの  
己れとは求めるものにあらぬ事漸く氣付くぬブナの無言に  
慕わしきこのブナ森に通い詰め幾年経しや思いもはるか  
振り返り振り返りつつ去るわれをブナ森は静かに見守るのみに

佐久間すゑ子

冬

朝食にふと触れた茶碗が冷たい。もう冬なのか

強い風だったと帰って来た夫の疲れた表情に冬を感じる

「日暮れが早い」とぼつりと言う夫に「今年は早かったね」と言つてしまふ

冬が来てトラウマに怯える。咳き込んでいる夫に気付き

はらはらと雪が舞う。下がらなかつた熱のトラウマがまた蘇る

薄く切ったリンゴと柔らかなお菓子。お茶の時間の二人

難しい会話も無く満ちた思いを抱いて、今日も静か

佐藤道子 花野

・ 甲

「天空の小径」の標花の道コスモス山の果ては青空  
暖かき秋陽を背にコスモスの花野を喜ぶ夫に添ふ幸  
コスモスの山に隣れる牧場にのんびり草食む淡路黒牛  
コスモスの花野見下ろすその果ての海に小さく明石大橋  
橋一つ渡れば淡路は別世界清らの空に地産のレタス  
犬猿の仲と常言ふ猿年の夫を迎うるやさしき狛犬  
恐がりの夫に寄り添ふカフェの犬「友達出来た又来る」と言ふ

椎名恒治 秋を病む（二）・ 橋

目覚めたる今朝もしらじらと薄曇りひろがれる北側の窓  
初々しき看護実習生一人にてわが全身を洗ひてくる  
暮れてなほ暗くなりゆく空にして輝く星の影さへもなし  
いつせいに灯れる街を見下ろしてわれは病み臥すひとりの眠り  
北側の窓際に臥して早十日星の光さへつひに見ざりき  
苦しさのをさまりし下腹さすりつつベッドの上に坐りてをりぬ  
病院食不味しとわれにこぼしたりし山本友一をふと思ひ出づ

清水 文 ポインセチア

・ 草

訪ひくるる人なき老のひとり居にはなやき届くポインセチアは  
見上げる猫はまなこをあかあかと染めてはにかむポインセチアに  
ふと誰かに呼びとめられしかだが誰も居らざるひとりの日々なる今日も  
日常のなすべきは為す確かさの他人とのさまに見えつおぼろ  
何ひとつ現実感などあらぬ日よ三食の飯さへ記憶はおぼろ  
今日ふいに生きてゆくことになるとは言へ死にたく思ふにあらず  
やがては「ぶ身といへいのちある限り食はねばならぬ今日の「エサ」買ふ  
やがては」「ぶ身といへいのちある限り食はねばならぬ今日の「エサ」買ふ

## 鈴木結志

冬の風物詩

・福

## 閑根和美

川島恂一先生

・埼

滝つら千本槍の今後白亜の殿堂築くであろう

南天の房実氷花につらら食べたきほどに朱すきとおる

寒風の芸術冬の風物詩しぶき氷の木木に花咲く

道真公目に映しなば如何に詠むしぶき氷の白銀の花

詩の瘦せる程の冷え込み月光にしぶき氷の青くまたたく

二月の寒明け閉ざす冷え込みにしぶき氷の凍凍と鳴る

薄氷を踏みて詩心呼び起こす春待つ里の一こまの生き

## 世木田照比古

指

・茜

焦れどもシャツのボタンのとまらねば朝の氣勢をそがれてしまう

錠剤が口に運べぬじれったさ指の痺れは寒さに募る

ピアノ弾く若者の指しなるなり曲がらぬ指を揉みて見ている

岡本太郎の五尺に足らぬマネキンが制作はげめと我を威嚇する

「芸術は爆発」と掲げる記念館たまゆら創作意欲湧かしむ

アメリカに渦巻く不満の捌け口か暴言のもとに票が集まる

目線をば合わせんとして屈むとき幼も真似て小さくなりぬ

## 根榮子

千し柿

・埼

十一月の雪にたちまち立枯れし皇帝ダリア意外に弱し

これからが花の見頃を降る雪の勝ちといふべし皇帝ダリア

毎年のことながらまた一年のたつのは速しと文にしたたむ

年末の大掃除はも「すす払い」と言いて若きらに笑われている

やり残すことの多しも年々に思うことのみ増えてゆきしが

卵かけ御飯といふ専用の醤油があると取り寄せる人は

干し柿に日の当たる家を過ぎながらいつ行きし山里ふとなつかしむ

## 高津砂千子

旅びと

・風

埒もない噂話はこれまでと車窓にあわく秋の虹たつ

夕暮をいそぐ梅田の高架下「おでん始めました」と墨の字ひかる

おもしろうてやがて哀しき発起塾「キャバレー」もどきに肢体をさらす

「三十年を二時間半で飛び越して」回文のような来し方ふりかえる

近江路はのべらぼうのひつじ田を草萌え色に染めて果てなき

胸をはる女も附く少年もひとしく初冬の夕影ひけり

独り居の母も飯莢く時分かと八頭芋の皮あつく剥く

冬空に澄む山並みを遠景に利根はかがよう それをわたりゆく  
黒つちに疎林あらわる車窓より師の在らばこそいとしき古河よ  
キリストン史われの学びのはじめより導きたまいし川島先生  
限りある命と知るにせわしさにかけ約束果たさざるま  
のこされし著書あることの幸いに言葉かわすごとく日々在り  
われも書かん師恩に報いる思いもち書かねば消ゆるあやうさを持ち  
かけがえのなき師ふたりを喪いし如月霜月この年の惨

## 高尾恭子

虹

・大

露つたう牢を拭かんと伸ばす手の先にひと刷毛雲が流るる  
双の手に包みきれない大きさの獅子柚子は誰が名付けしものか  
右に海ひだりに山をながめつて電車の十分旅びととなる  
今抜きし葉つき人參持ちくるわが家のうさぎのためにと書いて  
石けんを購うわれに訊く人あり「何に使うの」「手を洗うのよ」  
あまき香の銀木犀に会わぬまま秋は逝きたりなぜかさみしき  
体操のテレビ画面が変わりたりばと明るき紅シクラメン

高橋和代 浅はかさに

・桃

田土才恵 一葉

・宙

新年の歌会なればと熱あるも何事もなき態に耐へたり  
歌会終へ祝宴の席に氣も弛み氣遣ひ受けつつ全うしたりし  
この折の無理が祟りし病すでに八年を経し深み進みつつ  
「汚いなあ」肺の映像見し女医のあらはなる言葉に思はず笑ひし  
あまりにも進みの早きに驚きの医師の本音をまさまさ聞きし  
此の後も微熱に経はる身のつづく「たかが風邪」とのわが浅はかさに  
笑ひてはをれぬこの先病状はますます進むも止むるすべなき

竹下妙子

秋深し

・霧

辻彌生

冬日差し

・春

緑なす照葉樹林を仰ぎ見る秋のひと日の幸せに醉ふ  
白絹の漂ふごとく霧島を被ひ流るる秋の朝霧  
ゆく秋の贈物のごと川の面にイロハもみぢの赤きいくひら  
杉立の群なす真中火の鳥と見紛ふ楓のくれなるに燃ゆ  
秋の日の光を編みて散る銀杏いづべのあたり旅ゆくならむ  
露しどど置ける川原をひとりゆく今を生きむとまた思ふなり  
病篤き君を恋ひつつ文を書く真闇の中に届かぬ文を

田土成彦

異界

・宙

塔原武夫

落ち葉

・湾

月を見て寒夜遠吠えしたくなる時もあるなり犬に代はりて  
釣りをすると後ろで見ると傍ゆくわれと小春日のなか  
ぶら下がる脚が何本も空を飛ぶ何とかランドは異界めきつつ  
人だけのものにはあらず日光も風もみんなが使ふエネルギー  
光も無い宇宙の終はりがあるといふ知りて詮無き事のひとつに  
東海林太郎直立不動にうたふ歌その悲しみを心に受けむ  
今年また奥歯を一本失ひぬ未体験ゾーンいよよ深むか

一葉のたよりはメールしのきおり思いはるかに秋空をこえ  
漂いしころようやく戻りきて秋天深し刈田の上に  
秋ふかみあつけらかんの青き空祥月命日母おもいおり  
目に見えぬ人のこころのつながりを愛しとおもい哀しとも思う  
マグカップわが手のひらの温もりのしんまで透る大雪すぎて  
懐かしさこみ上げてくるマグカップ子育てさなかに瞬いし日を  
メール来て野菜の種を蒔きしこと告げたるひとの顔の頬ちくる  
辛抱を心棒と書く日記かな淋しきおもいのがれんとして  
冬日差し風のなれば庭に出て落葉の始末かきよせて幸  
庭内に酢橘キウイ実らせてこの幸せが淋しかりけり  
歯軋りをするも人齒はからなく来し方おもう 私の人生  
それかえる朱のはなびらを鬼百合と名付けし人をおもえば親し  
思い出も希望も失せて米寿と云うこの現実を確と受けとむ  
このいのち来し方かさね懸命に生きたとひとり納得をする

虎 谷 信 子 百 歳

・伴

萩 葉 子 黄 葉

・銀

百歳の誕生日、迎へらる花子夫人。言祝むかな 師よみそなはせ  
師をささへ大家をささへこし夫人、今は閑かにマンションに住まふ  
若き日師は「太良と花子や」可笑しみて、ゑまひ語ら旅とも共に  
川ぞひの風情ととのふ 師の家に、通ひ学びし。杳き日のこと  
前栽より下りて 河原の螢狩り。亦広座敷では 長唄の会  
戦いくののち接收されし 大屋敷。荒びしならむ 門前の大樹も  
百歳とはすさまじきこと さはあれどまみゆる事の速のくさびしさ

中 島 央 子 さかさまの鴨

・森

秋の陽に水かきの足太ぶとしかも目科かも科さかさまの鴨  
白鷺のデー<sup>ト</sup>なるらし汽水池首をちぢめて二羽の飛びたつ  
車椅子押す青年腰のあたり肩掛けカバンに秋の陽ゆるる  
江戸川は河口となりて淀みたり巷の騒音しづめて光る

対岸のシンデレラ城望みつつンルバー料金にて豆汽車に乗る  
噴きあげて崩れる噴ける水の華遠ざかりゆく背を見てゐる  
ちぎれつ消えゆく雲のいそがしく暮るるにはやし行合の空

中 島 義 雄 摩 滅

・岡

妻の鼻梁は斯く高かりしかしゆはしゆはと酸素吸入の噴き余る時

死後の衣裳のことを言はむとしたらし言ひさしてまた深く眠りぬ  
純卵のやうな朝日の上りきて妻は確かに呼吸してゐる

心電図の波形やうやく戻るとき孫の出産のことを告げやる

妻の鼻孔に吹き込まれるし酸素の音戻りて寝ねむ耳より消えず

金庫開く番号さへも妻のみが識るとし言へば医師が笑ひぬ

七十年摩滅の貌を寄せ合ひて「卒寿」の歳の計画をする

車窓より有楽町のビルとビル いちょうの黄葉チラッチラッと  
久しぶりお久しうりと手をとりあう上野改札街道仲間と  
五街道共に歩いた思い出は家族に感謝の言葉で結ぶ  
お互いの日常書きいる十年は家族の入院手術も混みて  
例年なく実をつけた蜜柑の木手のとどくところ毎日ひとつ  
緑道ですれちがうとき木の橋の手前で会釈名は知らねども  
ふるさとの舟形山もきっと雪幸せな日の夢はふるさと

白 子 れ い 急 逝

・洛

ひと雨ごといろづきを増す楓葉を仰ぎつつ想う吾に過ぎし秋  
茶席当番七日後にひかえ急逝の師を慰めんと社中の協力  
優しき声いつもかけくれし人なりて我也悲しむその急逝を  
急逝の君よみそなわせ社中さん一つころに茶席勤むる  
代々を茶のみち一筋貫かれし名残の棗・茶杓もゆかし  
淋しきと誰も言わざる淋しさの茶席に充つる 外は秋晴れ  
径おおう桜もみじ葉踏みてゆく足裏にやさしも古葉のぬく味

橋 本 曠 子 河内長野莊

・伴

霜月の 千早赤坂ふもとなる。河内長野莊に ひと日 遊びぬ  
小春日の 光の下にひろびると 河内平野のひろこりて 見ゆ  
楠氏ゆかり 千早の杜に 杳き世のいくさのあとを しばし偲ひぬ  
常日頃 音訳ボランティアにいそめる Nぶんぐるーぶ集ふ  
紅葉の盛りを過ぎし山山の 緑の木樹の 深き色あひ  
天然のいで湯の中に のびのびと。日頃の疲れ、徐々にとけゆく  
明けやらぬ 露天の風呂に身を沈め、しばし現世。忘れるにけり

## ばかりよっこ

青き一閃

鹿

檜垣美保子

夕焼け

・昴

時みちて季に生れたる蟻蟻らの細き青きを散文とみた  
かまきりの幼いっせいに散りほえる青き一閃あざやかなれり  
おさらば母を知らざりその母も我が子知らざる生放たれる  
子を持たぬ男女の歳月をたたみ込みゆく力学のあり  
うたという魔物に憑かれ気がつけばびょうびょうとしてとめどもなれり  
いつよりかうたに溺れてしまいたり泳ぎ下手なれば溺死寸前  
斯く月の淵める道に立ちおれば幽界のいちにんとし人おもうらん

## 浜谷久子

さなぎ色

地

福田庸子

沈殿池

・今

新しい朝のにおいは草の露枯葉の湿りからつぼの道  
この一步踏み出せば東もう一步踏み出せば空さなぎ色した  
かなしみを深くひそめて笑みかける人のまなこに吸われて秋日  
黄から朱へ朱から赤茶に翼色メタセコイヤはなお空目差し  
不確かな秋をおくずおず、ふたたび存分に咲く金木犀は  
一日は十分起伏に富んでいて朝の順調夕への落胆  
立ち止まることの少ない来し方を取り戻すかに立ち往生する

## 浜本茉美

嫩葉

・夢

藤川和子

初冬の香り

・眉

花鉢の中にこんもり森をなし唄うがごときオキザリスの花  
枯れ草の根方の抱く蓬の嫩葉いきいきとして春をのせいる  
続けざまに近所の老いの三人過ぎさむざむとして冬天遡し  
世界中不穏の空氣漂いて「看過」とう言葉の目立つ記事  
朝一番ふたつの湯呑みに茶をそそぐこの慣わしを傳せとせん  
外出せんと自転車の鍵を捜す夫そろそろ近づく物忘れ群  
わたくしの心のリボンをしっかりと受けとめてくれる友ありて日々

さざんかの生垣に頭さし入れてひーよひーよと鳴く鳥のこえ  
言いにくきことを書き終え手のひらに封書の重さ計りていたり  
文語にて新仮名遣はあり得ぬと言う人ありてふわり受けとむ  
ははと座し仏具をみがく日暮れどき金属みがきの薬剤におう  
従順にいのちにしたがい過ぎませり長命の祖母短命の夫  
ひとり居て独りはあかるきしきしきとおもう六十二歳なりけり  
沈みゆく日はみぬままに白き壁染みて夕焼け消えてゆくまで

魔屋の浴室に残る石鹼の匂に不意を突かれたりけり  
独り身を貫きし姫は生き切りて鉱山管理者の意地を通せり  
昭和天皇ご一家の写真仰きみて過ごし日日か紅葉ひねもす  
閉ぢられて七十五年の今もなほ金属汚染水したり落ちぬ  
鉱脈を探りて穿つ代代の跡沈殿池に水さらしゆく  
閉山後を散りたる企業の負を担ふ沈殿池の泥の底見ゆ  
林道の轍ゑぐれてますます人に寄せつけぬ選鉱場跡

摘きたての柚子をどつさりレジ袋今年も届く初冬の香り  
柚子味噌はとろり炬燭はほつこりと祖父母おだしく座してゐましき  
吸気ふかく柚子の香りに活きづきていそいそ姫は柚子味噌を炊く  
陽のいろの匂ひさはやかゆすのはだ八十路をみなはそと撫づるよし  
白抜きの紋付あざやか冬鳥は残りの紅葉に逢はむとぞ來し  
夕闇の閉ざせる刻を着ぶくれて人と出合はぬやうに避けゆく  
おもねりも威もなく平和な老いの日よ川鶴は不意に光と翔でり

藤田美智子 木馬

・新

「おはよう」と唇は確かに動きたり少年なりの朝の挨拶

教室に舌を呼ぶ声のやはらかし行書の文字を筆に書きつつ  
酒好きの医師はよき友わろき友徒然草を児等は楽しむ

もつともつとせがませしことなりしよ遊具の木馬も止まれば下りき  
いちめより逃れて戻るふるさとのあると思へず「自主」避難ゆゑ  
青き電球を巻かれたる木木の戸惑ひが点滅しをり雪空のもと  
路地を一本違へたるらしあるはずのなき教会が不意にあらはる

### 船田清子 子の釣果

・天

みごとなる十三夜の月納骨の明日の晴天をあざやけく告ぐ  
月の夜を徹して上げし子の釣果太刀魚十匹銀にかがやく

「夜ごはん」と満面の笑みにさし出せる二皿の上なる銀のかがよひ  
嫁のさばく太刀魚のさしみ白き身のかそけく甘きがのみどにとろり  
食卓は子の釣り自慢餌をつつき深みへ沈む引きが大事と

慌てもの餌のきびなごを丸呑みしあはれたち魚一生のをはり

太刀魚のやさしき味を笑み食みし君へ供へむためらひ めぐる

### 久我田鶴子 まばたき

・羊

低き地の小沼が見てゐるいちにちのまたいちにちのまばたきの間を

おまへは何をしてゐるのかと静かなる眼はひらかれてわれに降りくる

食べたさうな口つきだして水面にすれすれの顔おまへなにもの

梅花藻がこんなどころに 水中の花を咲かせて気泡を放つ

無農薬のたまものにしてカメムシの食ひ跡まじる新米いただく

鈴子さんのケーキが運ぶしあはせの背後に見えき戦争と飢ゑ

アスファルトを這ひゐる裸おけらなり雨降る秋の駅までの道

二〇一六年十二月八日、アウェイーナ大阪芙蓉の間に、天平  
グループとして船田敦弘先生を偲ぶ会をおこなった。

七月十日のご逝去の後も、歌会を続けていくことがご遺志に  
添うのではないかと、高津ガーデンでの歌会も、城陽福祉セン  
ターでの歌会も、予定通りおこなってきた。

高津ガーデンの歌会は、隔月偶数月に行い、十二月はどこか  
他の会場で忘年会を行うのが慣例になっていた。十月の歌会の  
後、今年はどうするかという話になつたとき、「船田敦弘先生  
を偲ぶ会」にしてはという意見が出、他の方々も異論は無く、

船田清子先生と坂上直美とで八日に設定した。  
そのことを知った城陽での歌会（やましろ歌会）の方々が、  
自分たちも参加させてほしいということになり、高津での歌会  
(天平歌会)と合同での開催となつた。

さらに、いつも高津においてくださっている愛箱グループの  
宮本靖彦さん、宙の会の田土成彦さん・才恵さんにもお声をか  
けさせていただき、ご同席いただいた。かつて天平に所属して  
おられた地グループの浜谷久子さんもお誘いしたのだが、声か  
けの時期が遅くなってしまい、ご出席いただけなかつたのは残  
念で、申し訳なく思つてゐる。

当時は、所用や健康上の理由で全員出席とはいかなかつたが、  
船田清子先生を含め十四名が参集、コース料理をいただきなが  
ら歓談した。充分に内容を深められなかつたことに心を残しつ  
つも、船田敦弘先生を偲ぶ会を開くことによつて、二つの歌会  
の親睦がかなつたことを良しとしたい。

## 船田敦弘先生を偲ぶ会・報告 坂上直美(天平)

## 走馬燈

こなかよしと

詩の放浪者

人の死も未だ分からぬ幼い日に葬儀の列で供花持たされし  
病みし兄見舞う路傍の蓮華畠寝転び姉等困らせし日

花見弁当拵げた途端転げ落つお握り見つめる姉の横顔  
刑事と云う人幼き我を糺すお菓子で誘う手口まる見え

爺さんの家の無花果の幹に登りはしゃぎて鬼ごっこせしこと  
その頃よ事ある毎に父はよく坊さんになれとすすめたりしが  
十八歳志 固めて航空隊へ皇道死生観極めんと入隊す  
死ぬ様な訓練終えし兵士より順次特攻志願して征きぬ

終戦で死に損ないて復員せし婆娘も変わらぬ試練の世なりき  
無から生まれ生から死へと無に帰するさらば我が一生も無かはた夢か  
人間の創造物もやがては燃えてはかなき線香花火

飛行理論よく討論せし戦友の計報手にしたり君今大空にかかる  
人恋しき時もあれども現世の果てまで来れば我が身ぞ愛しき

最初に書いた詩は小学生の時で、自分で作った詩を先生に見せたら、小学生には無理、盗作ではないかと、批判酷評され、落ち込んだ。次に中学生の時、家で『亡き母を恋うる歌』を作ったのを繼母に見られ、ひどく叱られた。訳が分からず、又もや詩から離れた。それでも、心貧しかった私は自分の心の糧として秘かに詩で自分を慰めていた。

昭和二十年終戦で霞ヶ浦海軍航空隊から復員。翌年から、鹿児島知覧町で父経営の澱粉工場の責任者として勤務。地区有志会の法泉寺住職岩見氏より、昭和三十五年頃、俳句の青野沙人先生を紹介され、俳句の初步を学んだ。次いで、同じ地区有志会の川畑夫人から短歌のばば先生を紹介されたが、その時は、面会はありませんでした。

昭和四十五年父死亡。昭和四十九年愛妻を失くし、一人追悼の詩を作り、仕事に励んで居りました。その同年、ばば先生の『星を釣る女』出版記念会に参加し、山本友一・桃原邑子両先生とも初めて会いました。ばば先生とはそれまでも何回か会っていましたが、平成二十四年何も分からぬ私を「それいゆ歌会」に勧誘して下さり、正式に加入。今は良き先生方や歌友と歌作りに励んで居ります。

## 今月の二人

はけの坂道

小山 美香

私を育みしもの

武蔵野の面影残す樹々そびえ渡るそよ風ほほをなでゆく  
うつそうと大樹のトンネルぐり抜け夏なお涼しきはけ道を行く

古くより坂の上下を往き来せり「平代坂」と名を残したり

用水路引きて水車のありし道「車屋の坂」と今も呼びたり

水の神祀る神社の池に落つ瀬音豊かに崖線の湧き水

小金井の地名の由来とう祀には黄金の泉涸れることなし

とうとうと湧きて流れる水すくい首筋冷やせば汗もひきゆく

夫は山吾は海辺に育ちきて共に住むまち「はけ」に「湧水」

雪国に育ちし夫の生家には今や人なくひそと静もある

雪つもる厳しい冬を目の前に窓を囲みて冬支度せり

ひと仕事終えて娘とつかる温泉に話はずみて心温まる

雪深き会津の里にて冬を越す数多の知恵に感服したり

紅葉に早も染まりし奥会津一足先に秋に包まる

私の住む小金井市には、国分寺崖線が横切り、「はけ」と呼ばれる段丘があります。緑が多く、湧水が流れ、武蔵野の面影が色濃く残るところです。

温暖な伊豆の下田で生まれ、子どもの時を過ごした私は、「水」といえば「海」。夏は一日中、静かな入江の海岸が遊び場でした。幼稚園、小学校の同級生だけでなく、近所の異年齢での遊びも多く、自然環境も豊かでした。暗くなるまで外遊びや虫取り、おままごとの材料にも事欠かない程の広場や道端の草や実…こうした生活環境で培われた感性は、歌をつくることにも役立っています。このではないかと、とても大切な宝物に思っています。

また、歌会にお誘いいたいた飯田勤先生やご指導をいたいた椎名恒治先生、会の諸先輩方に知り合えたことも、歌を続ける大きな支えになっています。

結婚と同時に移り住んだ小金井に海はありませんが、多くの出会いがありました。そして、まちに目を向けてみると、故郷にない豊かな自然にびっくり。その情景を少しでもお伝えできれば嬉しいです。

◆今月の二人・こなかよしと作品評◆

十八歳　固めて

◆今月の二人・小山美香作品評◆

評者・久我田鶴子

こなかよし（小中義登）さんは、鹿児島市在住。実際にお会いしてみたら、粹な遊びも心得ているような方であった。今回の一連「走馬燈」では、自らの人生を顧みている。

・人の死も未だ分からぬ幼い日に葬儀の列で供花持たされし人生の最初に出会った人の死、葬儀の列であつたか。分からぬままに持たされた供花、今なお鮮明に残る記憶にちがいない。

・その頃よ事ある毎に父はよく坊さんになれとすめたりしが、「その頃」は、前の歌を読むと、やんちゃをしていた子供の頃のことのようだ。坊さんになれと事ある毎に言っていた父にとって、こなかさんは心配の種のような子だったのだろうか。

父の言葉の真意がさまざまに想像される。

・十八歳志<sup>じ</sup>、固めて航空隊へ皇道死生鏡極めんと入隊す

霞ヶ浦の海軍航空隊に十八歳で入隊。天皇のために命を捧げようという志を固めてのことだった。そして、そこでの仲間たちは、順に特攻を志願して征ったのだった。

・無から生まれ生から死へと無に帰するさらば我が一生も無かはた夢か

戦後に生き残ったこなかさんの、今の死生鏡と言つていいか。

鹿児島には、陸軍の知覧、海軍の鹿屋があつた。

・飛行理論よく討論せし戰友の訃報手にしたり君今大空にかれ

る

作品の前に「平成二十八年二月没」と鉛筆書きされていた。

六・八・五・八・十と、かなり字余りになつてゐるが、字余りにしてもこのように詠うしかなかつた思いを大切にしたい。

小山さんは、東京都小金井市在住。結婚後、いまだ武威野の面影を残すこの地に住んでいる。「はけの坂道」の「はけ」は、段丘のこと。崖があり、湧水も多く、緑豊かなところである。

・うつそつと大樹のトンネルくぐり抜け夏なお涼しきはけ道を行く

いかにも武威野の面影を残すところ。うつそつとした大樹は

柳か何かであろう。「うつそつとくぐり抜け」は表現として落ち着かないが、大樹の下をくぐって行く夏のはけ道の散策は気持ちが良かったことだろう。

・用水路引きて水車のありし道「車屋の坂」と今も呼びたり

今はもう水車はないが、坂の名前に往時が偲ばれる。固有名詞が活きている歌だ。結句は、「今も」とあるので「呼びたり」でいいか。「呼びいる」「呼ばれる」くらいか。

・とうとうと湧きて流れる水すくい首筋冷やせば汗もひきゆく 散策の途中で、湧水を掬つて首筋を冷やしたら、汗もひいていたという。爽やかな風も感じられるようだ。今は小山さんの地元となった「はけの坂道」を、自分の庭のように親しみながら歩いている姿が目に浮かぶようである。

・雪国に育ちし夫の生家には今や人なくひそと静むる この歌からあととの五首は、夫の故郷（奥会津？）を詠つていようだ。この歌の下の句の具体的な状況は、いかに？廃屋のようになつてしまつてゐるのか。誰かが住んではいるけれど、昔のような賑わいがなくなつたというのか。夫の生家で冬支度をしているようでもあつたが……。少し曖昧。